



First night



好きな子が
自分の膝に座り
大好きという

夢にまでみた
その光景

ほのかに香る
酒の香りが
現実に引き戻す



トキッ
理性VS緑谷愛

トキ



これでも
だめなの？

緑谷、いっかい
離れてくれ



あの…
嫌だった？

僕、えっと…
ちがうんだ

雑誌に書いてあって
そういうの
分からないから

その、さすがに
同じ気持ちだって
思っ

恥ずかしくて…
轟君全然
気づかないし

こうするしか
伝え方
分からなくて

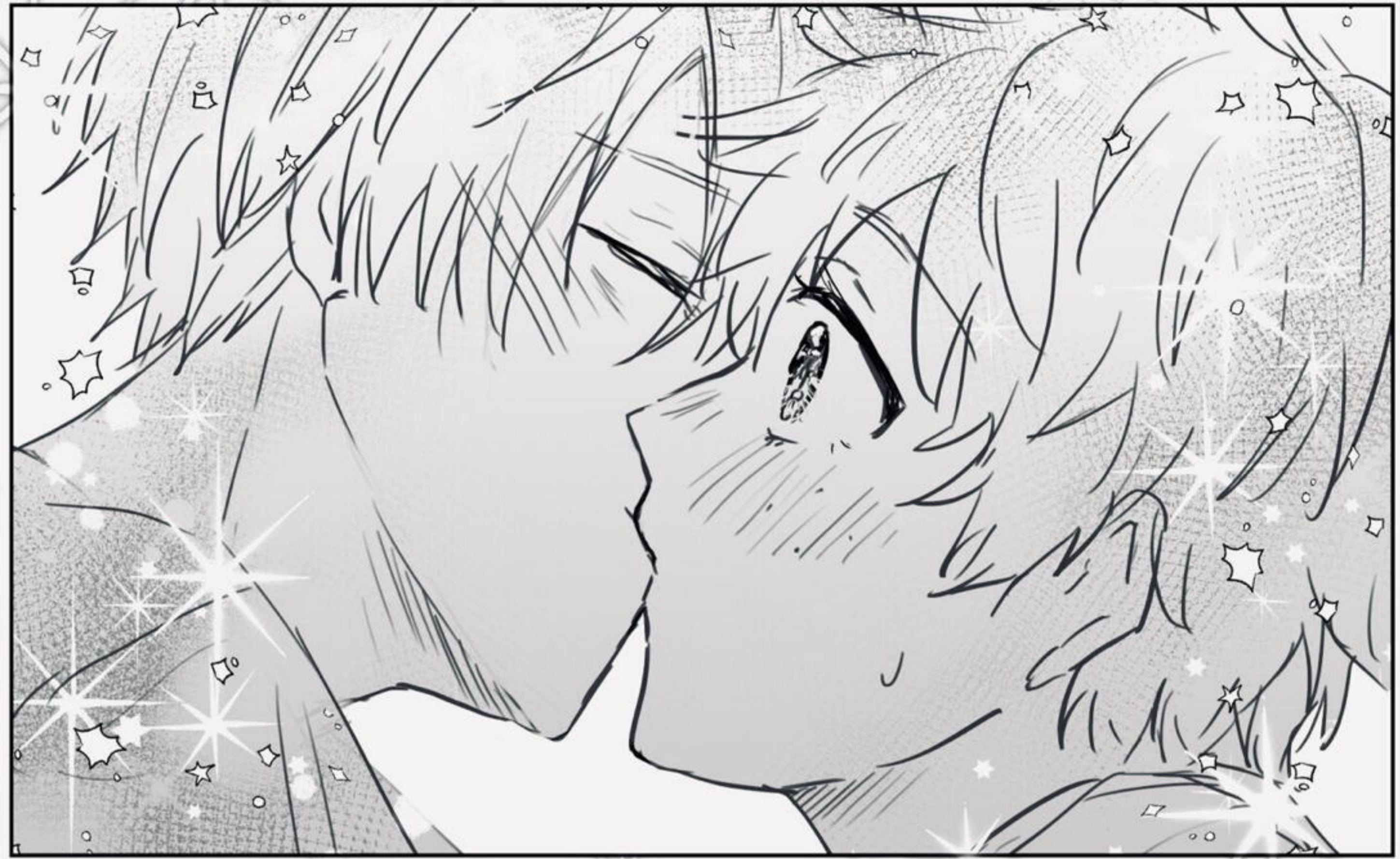
えっと…


実はそんなに
酔ってない…

いくじなしで

ごめん








ごめん
気付けなくて

お前に
無理させて



嬉しい

緑谷
好きだ

好き



愛してる

同じ気持ち
なんて
思わなかった

ずっと友達
でいいって

勝手に
諦めて

もう諦めたり
しないから

絶対に
離したくない



緑谷
結婚しよう





彼女から
徐々に



お願いします

あれ？轟くん
ち、近くない？
ちよっ——！

—終わり—





緑谷
疲れてるだろ
もう寝よう

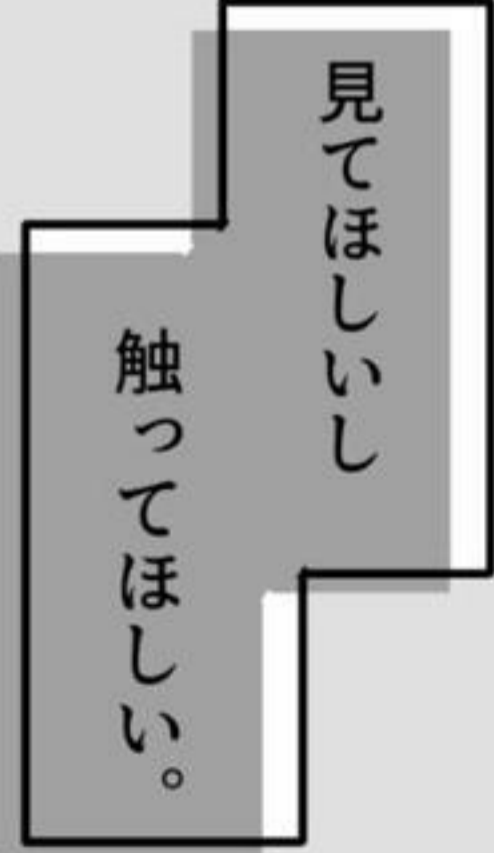
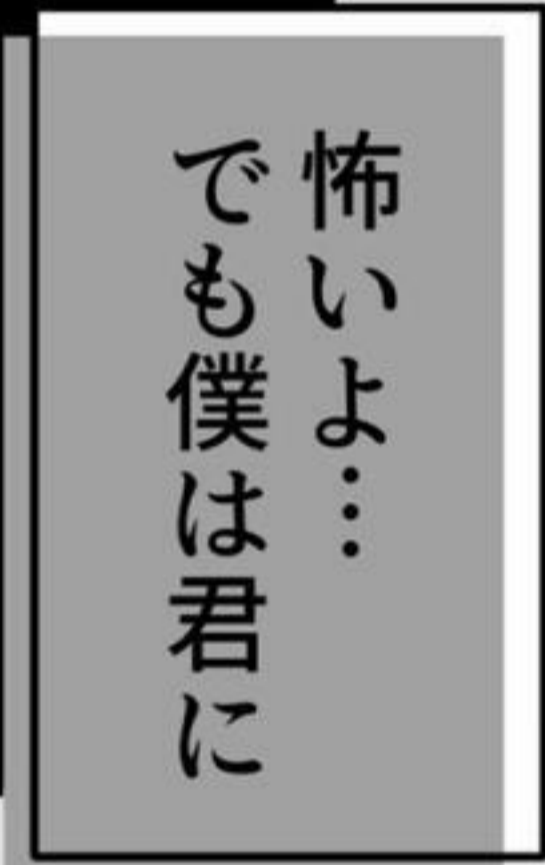
ちがっ

俺は女

轟くん……！
(思いが通じた!!)



もう
子供じゃないよ



轟くんは

僕と
したくない？

…わかった



ボロントツ





…正直
びっくりした

緑谷こういう事
苦手だと
思ってたから




これからは
我慢しなくて
いいってことだな

いや、
えっと…

うれしい。

終わり



吸血鬼とは
人の血を喰らい

長きを生き、
優れた能力を持つ
高貴なる存在

の、はず
なのだが…



えっ?!



コスプレエッチが、したい?!!
真剣な顔してると思ったら
なにをいってるんですか!



ガンギマリ時代シヨタ



えっ…
いやだよ?!
着たくないです!

紆余曲折あって
今に至るけど
丸くなりすぎだよ!



出久は
なにが
着たい?

↑諦めるという発想がない坊っちゃん

↓口説き時代



愛してる

好きだ

いざくと
けっこん
する!

ぼく

あんなに
可愛かった
のに…

コスプレ
えっちって
どこで覚えたの
そんな言葉あ…

さかー
さかー
さかー

↑激かわ幼少期

PON!!! なっ

なにこれ?!

PON!!!





PON!!

うわっ

PON!!!

焦凍くん!!

これ何を
参考に
したの？

君からこの服の
発想は出ない
と思いた
い
んだけど…

これだ、
有名らしい

ちちゃんと
エツチな
やつら！




焦凍くんの
ばがあー！！





なにぞれ?!?!?!
><



えっち……



出久

今夜は
寝かせねえから

あ、

※吸血鬼な～んも関係なかった！草

シャワーから滴ってきた水が肌に当たり声が出そうになる
湿気に包まれ視界はぼやけ、蒸し暑さが思考を鈍らせる
嘘のような静けさに反した大きい鼓動、これが現実なのだ
という事を痛いほど教えてくる。

ああ 何故こんなことになってしまったのだろう。

「轟くん とりあえずここに入って休憩をしよう」

この選択が間違いだった お互い服は汚れまみれで濡れて
いた やっと終わった激務に開放的になってしまったのかも
しれない

プロヒーローが嵐の中帰る方法はいくらでもあった、だが
疲弊した身体は「休憩」の二文字に弱かった このままでは
風邪を引いてしまう そんな思考の中の決断。

まさか偶々立ち寄った宿が「個性を使った新時代のラブホ」
だなんて思わなかったんだ。

「一部屋でも空いてよかったね」

フロントは無人、パネルで部屋を選ぶタイプだった
案内の通りに マグネットルームへ

部屋に入るやいなや勢いよく轟くんが抱きしめてきた

身体の全部がくっつく感覚 息遣いが耳元で鳴り、鼓動が
早まる 轟くんの匂いに包まれ恥ずかしくなり 思わず突
き放そうとした、ビクリともしない、

そう まるで身体と身体が磁石でくっついたみたいだ。

「と、轟くん？」 恐る恐る彼の顔を覗いてみた、彼もまた困
惑した表情を浮かべていた

「緑谷、どうしたんだ？」

彼からしたら僕がいきなり抱きしめてきて困惑といった形
だ お互いが状況を理解するのに二十分はかかっただろ
う。

「この紙によると、この部屋に入った二人は気持ちが高まる
と相手とくっつきたいと思ってしまう磁石のように離れら
れなくなってしまうって事らしい」思わず溜め息がでる、僕
の浅はかな考えの所為で轟くんを巻き込んでしまった。

長い沈黙が続く 混乱が収まった今、肩が触れる程度の距
離をキープしている。部屋の入り口で起きたことをふと思
い出す がっしりとした身体に包まれ 長年想い続けた人の
温かさを感じる すぐ近くには轟くんの顔 下心があったの
かもしれない、だって轟くんが僕に興奮するはずがない。ず
っと隠していた気持ちを押し殺す

このドキドキは隠さなきゃいけないものだから。

そのとき沈黙を破るように轟くんが口を開いた

「……風呂、はいるか？」

思ってもみない言葉だった、肩が少し引き合おう 轟くんの表情は真剣で僕の身体を心配していることが伝わってきた。

「どのみちこのままじゃ風邪引くだろ 目は瞑るが、心配なら自隠りする。俺の個性で服は乾かしても汚れは無理だから、心配なんだ」好きな人とお風呂に入るなんて幸せなで浮かれた事だろう……そう好き同士ならばだ、自分の気持ち相手に伝わってしまうような状況で平然としている自信がなかった。だが、これは僕だけの問題じゃない、僕も轟くんが風邪ひいたら嫌だ、

「うん、そうだよ、とりあえず任務だと思ってお互い平常心でいこう」

まるで、自分に言い聞かせるようにそう告げた。

互いに冷静になるような話をした、家族や友人の話 最近起きた事、この状況を上書きするように 言葉を紡ぐ。背中合わせで服を脱ぐ、音が生々しくて耳を塞いでしまいたいどこまで脱げば良いのか 彼はどこまで脱いでいるのか 頭の中はそんな事ばかりを考えてしまう。浴槽のドアノブに手をかけた時、案の定 胸の高鳴りは止められなかった。フランスが崩れお互いに支えようとした結果、僕が轟くんの

上に乗る形で抱き合っていた

「あ、「気付いた時にはもう遅かった、全て脱ぎ終わっていた自分の身体を轟くんに押し付けてしまう。」

「ごめん今離れるからっ」

急いで離れようとしてもすぐにくっついてしまう、吸い付くように自分の胸が轟くんに吸い寄せられる。無理矢理離れようとしても、少し浮きくっつくを繰り返している。自分の胸が何度も彼に当たりぺちぺちと小さい音が鳴る、恥ずかしさに涙が滲んだ。どくどくと心臓が鳴り止まらなくなってしまう吐息混じりに声が漏れる「ごめん、違っんだ、どうしてもドキドキしちゃって……そんなのじゃないってわかってる、けど、「恥ずかしさのあまり言葉がうまく出てこない」っ、俺も、わりい全部脱ぐと思ってなかった……」

何かを噛み殺したような声を出す轟くんにびっくりして顔を覗く、轟くんは顔を伏せ目を瞑り酷く辛そうな顔をしていた。ドバツと汗が噴き出て我に帰る、やはり彼の様に下着ぐらいは着けるべきだったと、

「んっ」

磁石の力がだんだん強くなって思わず声が漏れた、本当のゼロ距離 胸のドキドキはどちらのものかもう分からなくなっていた。

シャワーからは水が滴り、ピチャピチャと一定のリズムを刻んでいる。もう抵抗する力も気力もなくなり、そと彼の方に身を預けたふと違和感に気付いた、気のせいではない轟くんのそれが当たっている…次の瞬間轟くんは自分の熱を鎮めるように個性を使って冷気を纏っていた、彼の身体に所々霜が出来ていて酷く混乱した

「轟くん！何してるの?!」慌てて彼の手を掴んだ

「抑えてる、こんな事でお前を傷付けたくない、安心しろすぐに、落ち着くから少し待ってくれ」

そんなことしないでいいと言いかけた瞬間轟くんが無理矢理体勢を変えようとした、当たっている部分が自分のそれと擦り合い刺激され思わず声が出てしまった

「あつ まって だめ、動かないで、んっ、やつ あんっ」

自分でも聞いたことのないその甘い声にびっくりしたその刹那ブツツと熱気が襲ってきた。

「みどりや、その声やめてくれ……興奮しちゃう」

彼から放たれた興奮という言葉が耳に入る、耳を疑ったがこんな状況で興奮しない人がいるのだろうか、そう、彼は僕だから興奮しているわけではない。そう、きつと、期待は捨てたほうがいいに決まっている。

「だって、轟くんが動くから！僕だって恥ずかしいよー！」
とうにに恥ずかしさの限界を超えどうでも良くなってしまう

っていた。まずいと思い急に動いた罰なのだろう、轟くんの顔に自分の胸を押し当てる形になってしまった。

「んっ、みどりや、んにして……」轟くんは今僕の胸を啜え喋っている、恥ずかしさで死にそうになる。

「だめっしゃべらないで、あつ舌動かしちゃ、だめッー
ー！」轟くんはどうか逃れようとして舌を動かす、生暖かいそれは形を確かめるかのようにゆっくりと移動し次第に噛み付くように激しく動いた、我慢が出来ず何回も喘いでしまう、なんとか元の体勢に戻った時には、身体が溶けるような感覚に陥っていた、

下半身にじわりとした感覚が襲う 重なり合った所から轟くんの下着にまで自分のそれが染み込んでいく、

「ーっ」 限界だった

「みどりや?」彼の優しい声に我慢していた気持ちが溢れて止まらなくなる。

「うっ忘れて、エッチな女って思わないで、僕、轟くんに嫌われたくない」心からの願いだった、泣きじゃくりながら懇願する、どうか、どうか友達に戻れますように、

「嫌うわけねえだろ泣くな、こんなにも好きで、我慢してるのが辛くなってる」その一言で頭が真っ白になった 轟くんは僕の頬に落ちた大きな涙をすくい儂げに笑った

「好き?我慢?」彼は何を言っているのだろうかサーと涙がひき言葉一つ一つを確認する。

「俺は緑谷が好きだ」

「へっ？」

あまりにも間抜けな声が出た。

「お前勘違いしちゃうから言うておく、流されたとかじゃないから、ずっと好きだったんだ、高校の時からずっと、やっ」とここまできたのに、最悪なタイミングだな……」

轟くんが溜息混じりに口を開く

余りの出来事に脳の処理が追いつかない、追い討ちをかけるかのように愛の告白を十分近く披露された、口下手な彼から想像がでないほどスラスタと出てくる告白の数々、まるで何かの台本のように完璧だった、何年もかけて用意していたと誰がきいてもわかる告白に、蓋をしていた気持ちが出す。

「僕も、轟くんの事が好きです」

「……知ってる。何年かかったってお前が俺を必要としてくれるまで、諦めないって決めてたから」

知っていると言った彼の表情は

今にも泣き出してしまいそうな柔らかい表情だった。

—————

部屋に電子音が鳴り響く

押し付けられていた身体が急に軽くなるのを感じた。

「終わった？」

「解けたみたいだな」

彼は手を伸ばし優しく僕の髪を撫でる、愛おしそうに見つめ、ふれる様な軽いキスをした。たった一日で関係が変わってしまった、初めはあんなに離れたかったのに今では少し寂しさを感じてしまう。

もう二度と来ることはないだろう、澄んだ空気を吸い

「よし「ホテル」を後にする、

僕達の手はくっついたままだ。

作 まろ